

「それじゃ、行ってきます」

そう言って二泊三日の荷物を持つ永緑涼に、明瀬匠悟は冗談半分に声をかける。「吹雪の山荘だっけ？」

「ただの山荘です！ 僕は、吹雪の、なんて言った覚えはありませんよ」

「でももう冬だし、可能性がないとは——」

「ありません。不吉なことを言わないでください」

思ったよりはつきり言い切られて、明瀬は大げさに肩をすくめたが、すぐに真面目な顔に戻った。

「行ってらっしゃい」

永緑は一度ため息をついた後、気を取り直したように、

「……はい、行ってきます」

「黄金井先輩も一緒だしね。大丈夫、事件なんて起こらないよ、絶対。……うん、絶対、必ず、百パーセント」

「だから不吉なこと言わないでくださいってば！」

明瀬匠悟と永緑涼は、雑居ビルの一室を借り、完全紹介制の探偵事務所を構えている。「完全紹介制」というだけあって、彼らの知人か、知人に紹介された人物ぐらいしか、この事務所を訪ねてくる者はないので、基本的に彼らは暇だった。

二人は大学の推理小説研究会——通称「ミス研」で知り合った。

明瀬はそれ以前から素人探偵として密かに活躍していたのだが、ここ以後輩で推理小説狂の永緑がついてまわるようになり、しだいに意気投合して彼らは親友となる。その後、明瀬は大学卒業と同時にこの場所に事務所を構え、永緑は大学に通いつつ、そこに住み込みで働くことになった。

永緑は現在、大学院の一年目。前年度からミス研の会長を務めている。黄金井というのは、明瀬と永緑の先輩にあたる女性で、彼女もまたミス研の会長であった女性だ。

永緑がこれから向かうのは、ある山の山荘。実は、年に一度、ミス研の現役の会長と、引退した元会長が集う会というものが存在するのだという。そんなものがあるという話はほかに聞かないが、彼らのミス研にはあったようだ。まあ、それほど歴史が長い集まりではなく、永緑の五代ほど前の会長が始めたものらしいが。

永緑は去年も会長を務めていたので、今年は二度目の参加となる。会長の集いは、その年によって異なる場所で、異なるメンバーの主催で開催される。今回の主催者は黄金井で、場所はクローズドサークルの代名詞ともいえる「吹雪の山荘」を意識して、山荘での開催となった。

ちなみに、クローズドサークルとは、嵐の山荘や吹雪の孤島といったように、外界との連絡を絶たれた状況をさすミステリの用語である。

会長たちは本日、その山荘がある山の駅に集合し、そこへ向かう予定で、ちょうど今、永緑が事務所を出発しようとしているところであった。

「それじゃあ、今度こそ、行ってきます」

「行ってらっしゃい」

永緑が出ていくのを見送ってから、明瀬は事務所のソファに腰を下ろした。しばらくそのまま事務所の扉をぼんやりと眺めていたが、「うーん、暇だ」

つぶやいて、横長のソファに仰向けに寝転がった。

事件はそれなりのペースで訪ねてきてくれる。だからこそ食べていけているわけであるが、先にも述べた通り、毎日大忙しというわけではもちろんない。仕事がなくて暇な日が多く、今日はそのうちの一つだ。ただし、いつもより、永緑という話し相手がいらないぶん手持ち無沙汰なのだ。

何かすべきことはないだろうかと考えてみるが、それがないから暇なのであって、そんなものを思いつくはずもなかった。まだ日は昇ったばかり。もう一眠りしてもいいかもしれない。

2

「吹雪の山荘、かあ……」永緑は少し嬉しそうにつぶやいた。窓の向こうは予想外の、しかし思惑通りの大雪である。

明瀬の前では不吉だと拒絶したものの、実のところそれは期待の裏返しであった。

「まさか本当に吹雪いてくるとはね」黄金井も楽しげだ。

「そう面白がつてもいられないでしょうよ。これじゃ帰れないですよ」畑口はあきれたように言う。

「そうだなあ。雪で視界は不明瞭、道は滑りやすく、そのうえ急な坂とカーブが多いときた。車では確実に事故が起こるだろうね」

菱田は冷静に状況を判断している。土森はそれに補足するように、目を細めつつ、

「少なくとも、視界が回復するのを待たなければ下山はできないな。歩いて下りるにしても、道が滑りやすいことに変わりはないし、まして周りが見えないなどとなれば論外だ」

「ふーん、じゃあ、ここを降りられるのは早くても明日の朝ってわけね。もうすぐ夜だけど、それまでに雪は止みそうもないし、日が暮れちゃったら、山だから当然真っ暗なわけだし」

そうは言うものの、どうも倉内は下山について興味なげだ。

「大丈夫ですよ、きつと。明後日までずっと降り続くならともかく、もともと今日と明日はここで過ごす予定でしたから、特に問題はないと思います」

と伏見が控えめに主張すると、

「ええ、会の進行に影響はありませんとも。わたくし黄金井、ミス研元会長として、しっかりと計画を立ててきましたのでね」

大げさに胸を張ってみせる黄金井。菱田は、会長を務めたのは皆一緒なんだけどね、と返した。

吹雪で帰れないことはそれほど深刻に捉えられてはいないようである。伏見が言ったように、もともとこの山荘に二泊する予定だったということもあるが、それよりも「吹雪の山荘」というこの状況に、ある程度の高揚感を覚えているからだろう。

永緑たちミス研の会長一行が、車で九十九折りの山道を登ってこの山荘にたどり着いたのが、ちょうど今から三十分ほど前。少し前から降り始めていた雪が、その頃から勢いを強め始めた。たちまち吹雪となり、彼らが荷物を山荘内の割り当てられた自分の部屋に運び、一段落してみればすでにこの有様。まあ、ミス터리好きの集まりとしては非常に「おいしい」展開ではあった。

この集まりで、最も昔に会長を務めていたのは土森であり、彼以降の会長は、全員この会に参加しているそうだ。土森から始まり、倉内、菱田、伏見、黄金井、畑口、永緑の順である。最初の開催時には、菱田までの三人がメンバーで、それから新たな会長が就任するたびにメンバーは増えていっている。

永緑と黄金井以外のメンバーは、男性が三人と、女性が二人。土森、菱田、畑口が男、倉内と伏見が女だ。全体的に、ちよūdい男女性比と言えるだろう。

一日目にあたる今日に関しては、特に予定はない。自由に交流して、近況報告やミス터리談義を繰り広げる時間に充てられていた。

二日目からは、今回の主催である黄金井が、新作の犯人当て小説を作ってきたそうなので、それを読んでそれぞれ犯人を推理する。優秀者には豪華景品も、という話だ。それが早く終われば、また別の企画も考えているが、そっちにはばかり気をとられても困るので、それは犯人当てが終わってからの楽しみ、と黄金井は言っていた。そんなことを言われると、余計に期待して、なんとしても犯人を指

摘して見せようとやる気になる永緑。黄金井の扱いがうまいのか、永緑が単純なのか。

現在の時刻は五時五十分。夕食は六時なので、まだ十分ほど時間があるが、せっかく愛好家同士が集まっているのだ。わずかな時間でも、彼らが自室に引きこもるはずがなかった。

さっそく、話はミステリの方向に向かう。口火を切ったのは、進行役たる黄金井だった。

「図らずも雪に閉ざされた山荘となったわけですが、クロードサークルというと、どんな作品を思い浮かべます？」

冬の山荘を選んだのは黄金井なのだから、図らずも、ということはないのだが、誰もそれは指摘しなかった。

初めに答えたのは菱田だ。
「まず、誰もが思いつくのは『十角館の殺人』だろうね。あれだけは外せない」

「それを言うなら、クリステイの『そして誰もいなくなった』とか、『オリエント急行の殺人』とかもそうじゃないかしら」

倉内が言うと、ああ、それも忘れちゃいけない、と菱田は頷いた。次いで伏見が、

「私は、『斜め屋敷の犯罪』とか、好きです……」

「名作だね。そうだな、僕も好みで挙げるなら、『扉は閉ざされたまま』なんてのもいいかな」

「へえ、意外なところを突くのね、菱田君。倒叙ものを選ぶとは思わなかったわ。どうして？」倉内が面白そうに食いついた。

菱田は少し考えてから、「クロードサークルのいいところは、外の世界と隔絶されているために、純粹に論理で犯人を絞っていくことができるっていう点だと思っんですね。一方倒叙ミステリは、犯人がわかっている点だと思っんですね。一方倒叙ミステリは、犯人がわかっている点だと思っんですね。あの作品では、その両方を取り入れて、どこまでも理詰め作品として成立している。そこが好きなんだと思います。もう、ロジックの権化みたいで」

黄金井は楽しそうに笑いながら「熱いですねえ。いいですよ、そういうの、わくわくします。じゃああたしは、同じ倒叙の中から、あえてテレビドラマの古畑任三郎から『灰色の村』を推しましょう」

畑口は反射的に、「先輩、ほんとに古畑好きっすね」

「だって、あれほどサービス精神旺盛なミステリもないよ？ いつもあたしたちが読むような本格を、面白おかしく、でもその精神は受け継ぎつつ、犯人の目線から見せる。あんなに愉快で勉強になるシリーズはそうそうないね。『灰色の村』はその代表さ。舞台が閉鎖的な村——つまり一種のクロードサークルであることに加え、村人全員が犯人、という有名な『例の作品』を裏返して、それを村人たちの側から描くんだから脱帽だ。死体すら隠された状態で、村全体がたった一人の探偵役を騙そうとして、逆に翻弄される。こんなに楽しくて興味深い作品はないっての」

酔ってでもいるかのように熱弁をふるう黄金井。

畑口は苦笑して、「だからって、先輩に無理矢理シリーズ全話、ほぼぶっ通しで見させるのは駄目っすよ先輩。おかげでしばらく、オリピングのあの曲が講義中でもお構いなしにずっとリピートして大変だったんすから」

「えーと、何のことかなー」黄金井は目をそらした。「永緑君はクロードサークルといえは何を思いつく？」

「ちよつと、露骨に話を——」

「そうですね。僕は、『螢』ですかね。単純に、あの麻耶さんらしいひねくれたトリックと演出がたまらなく好きです」

「え、後輩にも無視されるとか普通に落ち込むんですけど……」

畑口の悲嘆はさておき、永緑の言葉に倉内が反応した。

「あなたが『螢』をそんなに好きだなんて、なんか変な感慨がわくわね。なんというか、その、本当にいるんだなって……。複雑な気分だけ」

永緑と土森以外、全員がうんうんとうなずいた。

「えっ、そ、そんなにおかしいんでしょうか？」少し慌てる永緑。

「いや、おかしいことはあるまい」土森はゆつくり首を振った。「そういうことは、人それぞれの個性だからな。別に恥じることもないだろう」

「そうよ」と倉内は同意して、永緑の肩にそつと手を置く。「いいのよ。あなたは、そのままで」

「え、は、はい？」永緑は余計にとまどって、挙動不審になった。

畑口の咳払い。「話を戻しますけど、俺は『星降り山荘の殺人』を推しますね。雪の山荘ものといえばこれでしょう」

「お、たまには真面目なことを言うね」と菱田。

「あの、俺の扱い悪くないっすか……？ 至極真つ当なことしか言っていないと思うんですけど」

菱田はごまかすように笑ってから、「まあ、確かに、状況は似ているね。ただし、あの作品では宿泊用のコテージと人が集まる管理棟とに分かれていたから、その点では大きく違うわけだ」

「あ、でもそういうえば、この山荘にも離れが一棟ありますよね。宿泊用ではなさそうでしたけど、あれ、何用なんでしょうね」

畑口が素朴な疑問を口にする、

「物置にしか使ってませんよ、あの小屋は」

と聞きなれぬ声が聞こえた。一同が声の方を向くと、この山荘を

一人で経営している金山かなやまという男性が立っていた。

「夕食の用意ができました。食堂へどうぞ」

3

この山荘は山の中腹の、テニスコート三つ分ほどだけ開けた場所に建っている。ここより少し低地にも避暑目的の別荘などが立ち並んでいる場所があるのだが、なぜかそこからやや隔絶されたところに山荘は存在した。

山道を抜けてこの山荘のある平地に出ると、正面に二階建ての山

荘があり、横の余っているスペースが駐車場、そして奥まったところに山荘の半分ほどの大きさの平屋の離れがある。駐車場には車が四台停まっている。うち一台は山荘のオーナーである金山のもので、二台はそれぞれ菱田と黄金井のものだ。ミス研の面々は二台に分かれて乗ってきたのである。そして最後の車だが、これはこの山荘に宿泊しているもう一人の人物の車である。

山荘は、入って正面には階段があり、上って二階に行く、客室がある。階段手前の横向きの廊下を右に行くと、食堂と厨房、オーナーの金山の部屋があり、左に行くと、手前の方に広間があり、奥には風呂場などがある。

先程まで広間で話していた一行は、食堂に移動した。今日の宿泊者は八人。つまり、ミス研のメンバー七人と、もう一人の人物だが、その人物は今日の夕食は断ったらしい。

一行は夕食をとりながら話を続けていた。

「クローズドサークルで、特に雪の山荘っていうと、『金田一少年の事件簿』を思い出すのよ」と倉内。

「あ、私もそれ思っていました」伏見が身を乗り出した。「私、金田一の漫画からミステリにのめり込んでいった口なので……」

「雪山の山荘で、あの準レギュラーのアイドルの子が出てくるのって何だったっけ」

「たぶん、『雪夜又伝説殺人事件』か『タロット山荘殺人事件』だと思えます」

「あ、そう、タロット山荘。あれがやけに印象に残ってるのよね。吊られた男の逆位置の話とか。もしかしたら、私が初めて読んだ雪の山荘ものって、あれだったのかもしれないわね」

「タロット山荘かあ、俺も覚えてますよ。あの話でもそうでしたけど、雪の山荘は、遭難者が助けを求めてやってくるのも一つのお約束っすよね」

畑口が言った。すると、その直後、

——ダン、ダン、ダン、ダン！

玄関の方から、乱暴に、というより必死に扉を叩く音が響いてきた。全員その音源の方に注意を向けて固まる。厨房で休憩していた金山が何の音かと食堂に出てきた。客たちの見ている方向と響き続ける打撃音から何が起きているのか察したらしい。慌てて玄関に走っていく。会のメンバーも、あまり興味のなさそうな土森以外は、ばらばらに立ち上がって、様子を見にいった。

金山によって玄関の扉が開かれると、登山用のレインウェアを着た二人の男女がなだれ込んできた。遭難者のようだ。

その光景を目にしたメンバーは、一斉に畑口の方を見る。

「いや、俺のせいではないんですけど……何か、すいません」

「まあいいさ。それより、今は彼らの救助が先だよ」

そう言うと菱田はいち早く前に出た。

金山と菱田、畑口の三人が遭難者二人を大きな暖炉のある広間まで肩を貸して連れて行き、倉内と黄金井は洗面所にタオルを取りに行った。

その場には永緑と伏見が残された。永緑は食堂で待機している土森に遭難者二人を救助したことを伝えるに行こうとしたが、そこで伏見の様子がおかしいことに気がついた。

じっと閉まった玄関扉の下あたりを見つめて、微動だにしないいや、体の前で祈るような形に組んでいる手がかすかに震えているようだ。

「伏見さん……？」永緑はのぞき込むようにして声をかける。

彼女はちよつと間をおいて、「……えっ、あ、なあに？」と我に返って答えた。「ごめんなさい、ちよつとぼうつとしちゃって……」

「大丈夫ですか」永緑は心配そうに伏見の顔を窺う。

伏見はやや力なく笑った。「ええ、大丈夫よ。土森さんに報告しなきゃね。戻りましょう」

そう言って食堂に向かう伏見の姿は、今にも消えてしまいそうなほど弱々しく映った。

救助された二人は島貫しまつらという男と長谷川はせがわという女だった。突然の吹雪に視界が塞がれ、道も雪に覆われて遭難していたところ、遠方にかすかながら光が見え、それがこの山荘の明かりだったという。山荘に泊まれる定員は十人で、ちょうど二人分部屋が空いていたので、島貫と長谷川はそこに泊まることになった。

お腹が空いているようだったので、金山は追加で彼ら二人の分の夕食を提供した。ちょうど食事を終えていた土森、菱田、黄金井、畑口の四人が抜けて、代わりに島貫と長谷川が席に着く。

倉内、伏見、永緑は食堂に残ったのだが……。

「ごちそうさまでした」

「どうしたの、伏見。顔色悪いわよ」

倉内が言うように、先程から伏見はうつむきがちで、ごちそうさまとは言ったものの、料理もまだ半分ほど残っている。いえ、大丈夫です、と答えはするが、その声は小さく、自己の存在を主張するのを避けているようだった。

伏見が立ち上がって食堂を出ようとした時、「……伏見？」と長谷川が気づいたようにつぶやいて、伏見を見つめた。

「もしかして出身校は——」長谷川は高校の名前を挙げた。

「……はい」

伏見が答えると、長谷川は立って伏見に近づく。

「へえー、久しぶりじゃないの。雰囲気変わったのね。名前聞くまで全然気がつかなかった」

島貫も知り合いらしく、伏見に体を向けて、「おう、あの伏見か。何だ、水臭いじゃないか、言ってくれないなんて。俺たちの名前は聞いてたんだから、当然、わかってたんだろ？」

「すみません……」伏見は縮こまっている。

「何謝ってるのよ。私たちとあなたの仲じゃない」

長谷川はそう言うが、永緑には仲がいいようには見えない。むしろ伏見は、二人におびえている。

助けないと、と永緑は思ったが、何をすればいいのかわからず動けない。どうしようと考えていると、倉内が立ち上がった。

「あら、あなたたち、伏見さんの高校時代の同級生なの？」

「ええ、そうですけど」長谷川が答えた。

「そうなんだ。でもごめんね。この子、さつきから具合が悪いみたいなの。お話は後にしてもらってもいいかしら」

長谷川は少しむっとしたようだったが、倉内が年上ということもあつただろう、伏見から離れた。すかさず倉内は、行きましよう、と伏見を連れて食堂から出る。

長谷川は自分の席に戻って、勢いよく椅子に座った。

横で彼女がピリピリしているのを感じて、永緑は残りの料理を素早く口に入れると、刺激しないようそつと立ち去る。食堂から出て扉が閉まる直前、何よあれ、と怒つたような長谷川の声が聞こえた。

4

永緑は広間に来たが、倉内と伏見はいなかった。二階の部屋に行つたのだろう。広間にいたのは、菱田、黄金井、畑口の三人だ。土森は食堂から出てそのまま部屋へ戻つたという。

先程の出来事を彼らに話すか永緑が迷っていると、二階からこの山荘のもう一人の宿泊客が降りてきた。その顔に見覚えがあつて、永緑は驚く。

「鳩村さん！」

鳩村と呼ばれた女性も驚いた顔をした。「あら、永緑さん。久しぶり。こんなところで会うなんて奇遇ね」

「知り合い？」と黄金井が永緑に訊く。

「ええ、こちらは、鳩村さんといって、明瀬先輩の中学、高校時代の同級生の方です。以前、何度か事務所に依頼に来られたことがありまして」

永緑が紹介すると、鳩村は頭を下げた。黄金井たちと鳩村が互いに自己紹介した後、

「それで、事務所に「何度か」依頼に来たってどういうこと？ そう訪れるようなことじゃないと思うんだけど」と黄金井が訊いた。

「そのことですか……。ちよつと、複雑な事情がありまして——」

鳩村は少し申し訳なさそうに語り始めた。

実は、この鳩村という女性は、日常的に事件に遭遇する、という厄介な性質を持つているのである。

それは物心がついたところからのことらしく、中学に入るまでは周りで起こる事件を解決する者がおらず、迷宮入りする事件も多かった。しかし、中学生になり明瀬と出会つてからは、彼が持ち前の推理力を発揮し、発生する事件を次々に解決してくれるようになった。大学は明瀬とは違うところに通うことになり、未解決の事件が増えるのではと危惧したが、それは杞憂だったという。別の探偵——

木埜きのと名乗る男だ——が現れて、事件を解決してくれるようになったからだ。ただ、鳩村はその探偵がどうにも苦手らしい。

と、こういった内容を鳩村がいつまでも説明すると、永緑以外のミス研メンバー三人は、話の突飛さに啞然としてしまった。

「そういう人って、實在するんだ……」

あきれ返つた様子で言う黄金井。この言葉は三人の総意であつただろう。

「ところで、鳩村さんはどうしてここに？」永緑が尋ねた。

「どうしてって……もちろん、山に登るためよ」

「鳩村さん、登山もするんですか？」

「ええ、毎年どこかしらの山には登つてゐるわ。今年は二年ぶりに冬山を、と思つただけけど、この雪じゃ諦めないといけないかもしれないわね。この山、例年ならこんな吹雪にはならないのに……」

残念そうに言う鳩村。永緑は、鳩村の不思議な力でクローズドサ

「クルになったのでは、とふと思ったが、口には出せなかった。永緑が登山目的でここに来たというのは、考えてみれば当然だ。冬のこの時期に、わざわざ標高が高くて寒い山に来るのは、永緑たちのような例外を除けば、山登りをする人しかいないだろう。ちなみに、永緑が鳩村に対し「登山」も「するんですか」と言ったのは、鳩村がほかにも多様な技術や趣味を持っているからである。ピッキングやら柔道やら……とかくハイスペックなのだ。」

「吹雪の山荘、飛入りの遭難者、加えて事件を引き寄せる謎の人物。これは、事件の臭いがするぜ……！」

「……先輩、申し訳ないんですが、鳩村さんがいる場合は、それ、何の冗談にもならないです」

真剣な顔で否定され、畑口は怯んだ。

「え、ほんとにまずいやつなの……？」

鳩村は気まずそうにうなずきながらも、断定的に、

「ええ、ここまで舞台が整ったとなると、十中八九、事件が起こるわ」

広間が、水を打ったように静まり返る。しかし、それは恐怖よりも、戸惑いが主な原因だった。鳩村の言葉は実際のところ正しいのだが、話を聞いただけでは、それを実感するのは難しい。深刻なのはわかってても、その深刻さがどれほどなのか掴めないのだ。

一旦は微妙な空気に包まれたものの、そのあとは一転して雑談の時間——とはいえ基本的にミステリの話だ——となった。

一度だけ、ミステリの話から外れて、

「えっ、菱田先輩って、伏見先輩とお付き合いされてるんですか？」

永緑が声を上げた。

「あれ、言っただけかな。……うん、そうだよ」

菱田は若干照れたように答える。すると畑口が悔しげに、

「はああ、いいっすねえ先輩は。あんな素敵な彼女がいて」

「何だ、僻みかい？」と黄金井。

「ええ、ええ、僻みですとも」

すねたように言う畑口の横で、永緑が訊く。

「推理小説に理解がある恋人を持つと、どうなんです？ やっぱり、ミステリの話ばかりなんですか」

「いやいや」菱田は笑って否定した。「ずっと殺人事件の話ばかりする恋人は嫌だろう？ そんなことはないよ。そりゃあ、僕も彼女も泡坂妻夫が好きだから、そういう話で盛り上がりたりすることもあれるけど、頻繁にあることじゃないさ」

そこで、黄金井が思い出したように、「泡坂妻夫といえば、明日、よろしくお願いしますね」

「え？」菱田はすぐにはピンとこなかったようだが、「……ああ、あれね。わかった。でもあれは彼女が主役で、僕は手伝いだよ」

今のが何のやり取りだったのかわからず、気になる永緑。

「何の話です？ 明日何かあるんですか」

しかし、黄金井は、「それは明日のお楽しみだよ」とはぐらかすように微笑むだけだった。

このあとも会話は続く。途中、倉内が二階から降りてきて輪に加わり、一同は、夜の十時ごろまで一階で過ごすことになった。

お開きになると、皆それぞれの部屋に戻った。この山荘の部屋にはそれぞれ植物の名前がつけられている。永緑の部屋は「葦」で、

鳩村の部屋は「水木」といった具合だ。部屋の形はほぼ正方形で、その正方形の手前の左に入り口、右にはクローゼットがあり、左奥にはベッドが、右奥には鏡台と小さなテーブルがある。

部屋に戻った永緑は、明瀬に電話することにした。事件への不安がぬぐえなかったからだ。今の時代、山でも携帯電話が通じる。

しかし、結果は通話中。別の人物との通話の最中らしい。

あとでかけなおそうか、とも思ったが、よくよく考えてみると、事件はまだ起こってないのだから、明瀬に話すこともない。結局、永緑はそのまま風呂に入って寝ることにした。

共同の風呂場は一階に二つあり、それぞれ男湯と女湯である。風呂

呂から上がると十一時前。髪を乾かした後、永緑はすぐ床に就いた。この日は平穩に終わったわけであるが……。
翌日、二人の人物が殺されることになる。

5

午前五時過ぎ。永緑は女性の悲鳴で目が覚めた。尋常ではない声。飛び起きて、寝間着姿のまま廊下に駆け出る。まっすぐ横に伸びた廊下を見渡すと、その端の部屋——島貫に割り当てられた「藤」の部屋だ——の前で長谷川が腰を抜かして座り込んでいた。まさか、と嫌な想像が頭をよぎって、一瞬足がすくむ。

その間に、永緑同様慌てて出てきた畑口が、永緑を追い越していき。永緑も腹をくくって、再び足を進め始めた。先に駆けつけた畑口が息をのむ。永緑は一步ずつ、気を静めつつ、畑口が見たであろう衝撃的な光景へと歩み寄る。

座り込む長谷川の傍から、恐る恐る部屋の中をのぞき込むと……。
——刺殺体。

ベッドの上で、島貫が仰向けに横たわっている。死んでいるとはつきりわかるのは、見開いた目と、胸につきたてられた刃物、そしてその周辺にじむ赤黒い血とその臭いによつてだ。

思わず目をそらした。人の死体など見るのは初めてのこと。早まる呼吸を必死で抑えつける。

「ひどいわね……」

気づけば、鳩村も扉の前に来ていた。続いていくつかの扉の開く音とともに、倉内、菱田、黄金井が出てきた。

永緑たちのただならぬ様子に、倉内が鋭い目で、何があったの、と訊いた。畑口や長谷川は慌てるだけで、永緑も声が出せない。

冷静に答えたのは鳩村だった。「島貫さんが亡くなっています」
倉内はより険しい顔になり、菱田はじつと鳩村を見つめ、黄金井は覚悟を決めたようにつばを飲み込む。鳩村は続ける。

「私は下に行つて金山さんと呼んできます。皆さん、現場の保存をお願いします」

そう言つて軽く頭を下げると、無駄のない動作で階段まで移動し、鳩村は一階へ下りていった。直後、土森も部屋から出てきて死体の発見を知った。

土森ら年長組は、事前に知らされたこともあるだろうが、死体を見ても比較的落ち着いていた。

鳩村に連れられて金山が階段を上ってきた。死体を見て、さあつと血の気が引いていく様子が、はたから見てもよくわかった。

一方、皆は気づいていなかったが、永緑は、鳩村の動揺する顔を見た。二階が上がつてきて、永緑たちの方を見た時のことである。

疑問には思つたが、そのことを訊く前に、
「……待つて、伏見はどこ？」

倉内の一言で、場に緊張が走つた。

そういえば伏見の姿がない。まだ部屋にいるのだろうか。ぐつすり眠つていれば、あのくらいの悲鳴は聞き逃したかもしれない。しかし……。嫌な予感にぬぐえなかつた。

土森が真っ先に動いた。伏見は「桔梗」の部屋だ。その扉を叩きながら、よく通る大きな声で、土森が呼びかける。

「伏見君。中にいるのか。いるなら出てくるんだ」

……反応はない。土森は永緑たちを見て軽くうなずくと、
「失礼だが非常事態だ。入るぞ」

そう言つて扉を開けた。部屋の外からは、中に誰の姿も見えなかつたが、踏み入つた土森が部屋を見回すとすぐ、部屋の手前側に何か見つけたよう、視線が固定された。永緑たちも部屋に入る。

部屋に入ると扉の脇に、服をつるすための背の高いクローゼットがある。しかし、今そこにつるされているのはロープと、そのロープに首をつながれた伏見だった。

「伏見……」倉内が小さくこぼす。

永緑は菱田を見やった。彼は悲しむように唇をかみ、目を伏せて

いた。永緑もいたたまれなくなつて下を向く。外では雪が激しく吹き荒れている。その中で、この山荘だけ、時間が止まったようだった。

6

ひとまず皆、一階に降りた。広間では全員が座れないので、食堂でそれぞれ席に着く。

警察には連絡したが、この吹雪では山を登ってくることはできないし、ヘリも飛ばない。到着は吹雪が止むのを待つしかなかった。しばらく誰も口をきかなかつたが、やがて金山が朝食にしないかと申し出た。

「よくもそんなことが言えるわね！ 人が死んだのよ。のんきに食事なんてしてる場合じゃないでしょ！」

長谷川がヒステリックに叫ぶ。こういった場合、あまり刺激しないのが得策なのだろうが、土森は、

「いや、食事でもしていったん落ち着くべきだろう。それに、頭が働かなければ、この中にいるであろう犯人を暴くことができない」「なっ——」

明らかな失言だった。相手の精神が不安定な状態で、殺人犯が近くにいる、などというさらに動揺させるような発言はご法度だ。

「——それならなおさら、殺人犯と同じ飯なんて食えないわよ！」長谷川はそう叫ぶと、食堂を走り出た。階段を駆け上がる音が聞こえたので、おそらく自分の部屋に戻ったのだろう。

「……どうするんですか、土森さん」黄金井が咎めるように言った。ところが土森は、我関せずといったふうには、鷹揚に座ったままで答えない。すると、菱田がじれたように立ち上がった、

「僕が彼女を呼んできますから、金山さんは構わず朝食を用意してください」
そう言って食堂を出ていった。

金山は言われた通り食事の用意を進め始めた。すでにある程度は支度していたらしく、十分ほどで厨房から朝食が運ばれてきた。テーブルに一通り料理が並んだ頃、菱田は二階から降りて食堂に戻ってきたが、その横に長谷川はいなかった。

「駄目です。出てきてくれません。少しの間、そっとしておいた方がいいかもしれませんね」

一同は、長谷川不在のまま朝食をとった。全員黙々と食べ進める。吹雪は少し勢いを弱めてきているようだ。止むまでには時間がかりそうだが、救助が近づいていることは素直に喜ばしい。

しかし、いまだ場の空気は重かった。どうにかならないものかと永緑は思う。喋らないことが悪いとまでは思わないが、それでは事態が進展しないし、何より気まずい。おそらくこの思いは皆一緒だろう。先程からちらちらと周りの顔を窺っているのだが、たびたび目が合うのである。

倉内が、ああもう、といらだちを口にしたのは、ほとんど全員が食べ終えてからだだった。

「このまま黙っていても仕方がないわ。雪は多少弱まってるみたいだけど、警察が来るまで、短くてもあと数時間はあるでしょうし、それまでずっと事件のことに触れないわけにもいかないでしょ。遠慮はなしよ、なし」

会話のきっかけを作ってくれた倉内に、永緑は感謝した。

「さ、賛成です。事件で気になったこととかでもいいので、何か話さないよ、気分が落ち込むだけだと思えます」

「あたしも賛成。状況の整理でも始めるのがいいかと」

この黄金井の提案で、とりあえず、事件の情報をまとめることになった。最初に土森が、

「被害者は、遭難者の島貫という男と伏見。島貫は刺殺、伏見は絞殺ということになるだろう。島貫の胸を刺した凶器だが、あれは登山用のナイフだな。あれが被害者の持ち物だとすれば、犯人の限定にはつながらないだろう。しかし、問題は伏見の方だ。あのロープ、

見たところ登山用のものではなく、普通の縄のようだ。何のためこの山荘に持ち込まれたものが不明だが……」

「奇術用ですよ」菱田が言った。「今日、彼女がマジックを披露する予定でね。ロープマジックもすることになっていました」

「あたしが依頼したんです。今夜、余興としてマジックでもしてくれないかって、伏見さんに」

黄金井が言う。永緑は昨晚の出来事を思い出した。

「ああ、昨日のやり取りはそういうことだったんですか。泡坂妻夫は、アマチュアマジシャンとしても有名ですからね」

永緑は納得してうなずく。土森は続けた。

「なら、あのロープも被害者の持ち物ということか。凶器での犯人限定は難しい。となると、アリバイや動機に注目したいところだ。まずアリバイからいこう。発見時、島貫の血が黒く変色しておおむね乾いていた。すでに犯行から数時間が経過していたとみられる。犯行は深夜だろう。アリバイを主張できる者は？」

十時ごろに一階の広間で散会して以降、個室に戻ったミス研メンバーや鳩村はもちろん、夕食を片付けた後は早めに眠ってしまったというオーナーの金山にも、アリバイなどあるはずがなかった。

それ以外の人物がアリバイを主張できない以上、おそらく長谷川にもアリバイはあるまい。監視カメラ等のないこの山荘内においては、他人の証言のみがアリバイの根拠となりうるからだ。持参したビデオカメラで一晩中自分を撮り続けていたというなら話は別だが。

「では、次は動機だ。偶然この山荘に迷い込んだ島貫を殺す動機があるような人物はいるだろうか。いるとすれば、それは同じく遭難者の長谷川くらいだろうか……」

「それについては一つ、言っておかないといけないことがあるわ」

倉内は、伏見が島貫と長谷川の同級生らしい、という事実を伝える。伏見は彼らを恐れていたようで、関係は良好ではなさそうだという感想も含めて。

「なるほど。であれば、長谷川には島貫と伏見の両方を殺す動機があつた可能性がある」と

「……まあ、そういうことになるかしらね」

「しかし、それは彼女を疑う理由としては消極的すぎる。ほかにも動機があつた人物はいたかもしれないし、この山荘に来てから動機が発生したとも考えられる。究極的には、無差別殺人の線もあるな。明確な動機がある人物はいないようだから、ひとまず、動機に関しては保留の方がいいだろう」

……さて、さっそく行き詰まってしまったらしい。物理的にも時間的にも、全員が犯行可能。めぼしい動機のある人物もない。これ以上議論を進めるのは難しそうに思われたが……。

「ところで、『戻り川心中』に収録されている短編五編のタイトルを覚えているか？」

土森があまりにも唐突に訊くので、一同は一瞬あつけにとられた。

「……戻り川心中？ 連城三紀彦の短編集がどうして今関係あるんですか」

畑口が怪訝そうに言うが、土森はそれを無視して、

「五編の題名は、巻頭から順に『藤の香』『桔梗の宿』『桐の柩』『白蓮の寺』、そして表題作の『戻り川心中』だ。一方、島貫は『藤』の部屋、伏見は『桔梗』の部屋だった。わかるだろうか？」

「この事件は、見立て殺人の可能性がある」

全員驚きで声が出なかった。その間に、土森は話を進める。

「第一短編『藤の香』では、身元不明の刺殺体が相次いで発見され、第二短編『桔梗の宿』では、遊女が首をつって死ぬ。人の死に方にも共通点があるわけだ」

「では、次は——もしあるとすれば、ですが——『桐の柩』に見立てて殺されると？」永緑が問う。

「私の推測が正しければな」土森はうなずいた。

「でも、この山荘に『桐』の部屋って、ありましたか？」と黄金井。金山は首を振って、「いえ、ありません」

「別に『桐』の部屋でなくても、桐に関連するものを現場に置いておくなどすれば、見立てとしては成立するだろう。例えば、五百円玉の表に描かれている植物だって桐だ。五百円硬貨を事件現場に添えるだけで見立てになる。……まあしかし、見立て殺人というのは、あくまでも可能性の話だ。『戻り川心中』との符合は、偶然かもしれない。参考程度にとどめてくれ」

見立て殺人の可能性が示唆されたものの、それ以上話し合うことがあるわけでもなく、一旦、その場は解散となった。ミス研のメンバーたちより早く、金山がテーブルを離れた。

「私は外に出て雪かきをします。雪もだいぶましになってきているようですので」

窓外に目をやると、死体を発見した時には、ほとんど横に流れていた雪の軌跡が、今は斜めの線を描いている。

では、と言って食堂を出ようとする金山に、

「僕も手伝いますよ」

と菱田が腰を上げた。それなら俺も、と畑口が便乗する。金山は遠慮したが、結局、その三人で雪かきに出ることになった。道具は物置、もとい離れにあるらしく、三人は手ぶらで出て行った。

その後、土森、倉内、黄金井は広間に向かい、食堂には鳩村と永緑が残った。

「永緑さん」鳩村が口を開いた。「今、黄金井さんたちと広間へ行ったあの男の人、どういう人なの？」

「土森さんですか？ ええと、どういう人と言われましても……」

「待って。……土森というのね？」

「ええ、そうですけど」

「だとすると……。もしかして、その土森さんの下の名前、術学的の『術』という字なんじゃないかしら」

「えっ」永緑は目を見開いた。「どうしてわかったんですか？」

鳩村は手帳を取り出して開くと、ペンでそのページの右側に

「土森術」と書いた。「この字面、何となく見覚えはないかしら」

「うーん、あるような、ないような……」

「この前、私が明瀬君の事務所に来た時、例の探偵のことについて教えたわよね。あの探偵のフルネーム、覚えてる？」

「え？ ええ、確か……ああっ！」

「そう、『木埜玄行』よ。漢字の部分部分を抽出して、再構成した名前みたいね」

「え、じゃあ、土森さんが、鳩村さんの言っていた探偵……？」

「そういうことね。今朝、二階で木埜を見た時は、それはもうびっくりしたわよ。あの冷血探偵とこんなところで遭遇するなんて」

「でも、土森さん、自分が探偵をしてるってことを言いませんね」

「あいつのことよ、きつと何か企んでいるに決まってるわ」

鳩村の木埜嫌いは相当のものらしい。しかし実際、木埜という探偵は関わった事件で好き放題しているの、仕方ないのだが。

「それで、どうするんですか。土森さんを見張ったりするんですか？」

「いいえ、木埜ならきつと、見張りなんてものでもないわね。對抗するなら、あの男より早く事件を解決しないと」

鳩村は一呼吸おいて言った。

「探偵には探偵よ。明瀬君に相談しましょう」

7

「はあ、まさか例の探偵が、自分たちの先輩だったとはねえ……」

明瀬は電話の向こうで複雑そうに言った。

「まあ、だいたい悪い事情は理解したよ。事件現場の状況をもう少し知りたいから、悪いんだけど、フィールドワークを頼めるかな」

通話はスピーカーにして、鳩村と永緑、どちらにも聞こえるようにしてある。

「要するに、か弱い女性にもう一度死体を見せようってわけ」

「申し訳ない」あまり罪悪感はなさそうな声。

鳩村はふう、とため息をついて、「いいわ。行きましょう」

鳩村と永緑は、食堂を出て二階上がった。

「それで、島貫さんと伏見さん、どちらの部屋に行けばいいの？」

「伏見先輩の方を頼むよ」すぐに明瀬の声が返ってくる。

「えっと、僕は外で待っていていいですか……？ 死体には、先輩たちみたいに慣れてなくて……」

「あ……」何かを察したように明瀬は沈黙したあとで、「うん、じゃあ、永緑君は部屋の前で待機しておいて」

たびたび事件に遭遇する鳩村や、その隣で事件を解決していた明瀬と違って、永緑は、死体を見ることに慣れてなどいない。

鳩村が「桔梗」の部屋に入ると、明瀬の声が、

「伏見先輩の死体の状況が知りたいんだ。首の、ロープの跡はどうなってる？」

明瀬に言われ、鳩村が観察してみると……。

「……なるほど、そういうこと。ええ、きれいなものね」

鳩村は納得したように呟いた。

「どうやら、予想した通りだったようだね」と明瀬。

しかし鳩村は、はっと気づいて、「でも待って、台がないわ」

「ない……？ 部屋のどこにも？」

「ええ、代用できるようなものも見当たらないわね」

「ど、どういうことですか」

先程からの二人の会話が理解できず、部屋の外から永緑が訊くが、

明瀬はその質問には答えずに、

「まずいな……。次は長谷川さんの部屋に向かってくれないか？」

「長谷川さんの部屋ですか？ 島貫さんではなく？」問い返す永緑。

「うん、長谷川さんだ」明瀬ははっきりと言い切った。「呼びかけて、

返事があればそれでいいんだけど、もし返事がなければ……覚悟を決める必要がある」

永緑はつばを飲み込む。「わかりました」

鳩村と永緑は長谷川の部屋に移動し、外から声をかける。

「長谷川さん、いらっしゃいますか。返事だけでもお願いします」

……しかし、返事はなかった。

「反応がないなら、入ってほしい。永緑君は外で待機した方がいいかもしれないけどね」真剣な声。

「ぼ、僕、外で待ってますね……」永緑は中を見てしまわないように、部屋に背を向けた。

鳩村は黙って部屋の扉を開ける。その部屋の真ん中には、喉を一

突きにされた長谷川の死体が転がっていた。

「長谷川さんが、殺されているわ」鳩村が言う。

「……そう。死因は？」

「刺殺のようだけど、島貫さんと違って、喉を刺されてるわね」

「『桐の柩』では、首を突かれて一人殺されるからね。見立てで間違

いはなさそうだ」

そう明瀬が言ったところで、鳩村は凶器を見て気づいた。

「あのナイフ、もしかすると……」

「何か気づいたことが？」

「ええ、長谷川さんの喉に刺さった凶器、島貫さんを殺したナイフと同じに見えるわ」

「なるほど。確認してきてくれないかい」

何を、とは言われなかったが、鳩村は「藤」の部屋へ向かう。扉

を開けて中を確認すると、

「やっぱり、凶器がなくなっているわ」

島貫の胸に刺さっていたはずの凶器が消えていた。

「つまり、島貫さんの胸に刺さっていたナイフを犯人が回収して、

長谷川さんを刺したと」

「そうなるわね」

言いながら鳩村は扉を閉め、長谷川の部屋に戻った。

「……じゃあ、ほかの人に知らせる前に、部屋に桐に関連するもの

がないか探してくれないかい。どんなものでもいい。その辺りで目

立っているものはない？」

明瀬に言われて鳩村が部屋を見回すと、すぐに目についたのが、被害者の手前の床に落ちている、数センチ四方の紙片だった。

「小さな紙切れが落ちているわ」

鳩村は落ちている紙片に近づいて確認した。

「上質紙かしら。本か雑誌の一部を切り取ったもののようなね。見覚えのあるようなマークが印刷されているわ。これは……家紋？」

「……もしかして、下に三枚の葉があつて、それぞれの葉の上に茎や花があるような構図のやつかい？」

「ええ、そんな感じだわ」

「なら間違いない。それは桐の紋だよ。本の一部ということとは……」

明瀬はしばらく黙ったあと、何かに気づいたよう、やや早口に、「永緑君、一階に戻って皆に、長谷川さんが死んでいると伝えてほしい。それと、全員をいか所に集めるんだ。大至急で頼む」

明瀬の声が緊張していたので、永緑はせつかく部屋に背を向けていたのに、思わず振り返ってしまった。三人目の死体を見て、気が遠くなりつつも、「はっ、はい！」と返事し慌てて階段を下りる。

「鳩村さん。今から一旦、電話を切るけど、その前にこれからの注意点をいくつか伝えておきたいんだ」

永緑がいなくなつてから、明瀬が言った。

「ええ、何かしら」

「まず、おそらく事件の犯人は——」

8

雪は勢いを急速に落とし、もはや吹雪ではなくなった。

永緑は階段を駆け下りると、まず広間へ向かう。そこで、長谷川が死んでいることを土森、倉内、黄金井に告げた。タイムイングよく、金山と畑口も雪かきを終えて戻ってくる。二人にも同じことを繰り返したところで、永緑ははたと気づいた。

「菱田さんはどうしたんですか？ 一緒に雪かきをしていたんですよね」

「ええ、そうですよ。道具を離れに戻して、山荘の玄関前までは一緒に戻ってきたんですが、そこで菱田さんが、『そういえば昨日、自分の車に飲み物を置き忘れてきたから、それを取ってくる』とおっしゃって、それで、私たちだけ先に中に入ったんです」

金山が丁寧に答えた。

「一応、先輩には全員を集めるように言われたんですが……」

困ったように言う永緑に、黄金井が反射的に訊く。

「先輩って？」

「あ、ええと、さっき、鳩村さんが明瀬先輩に連絡しまして……」

「えっ、明瀬に？」畑口が驚きの声を上げる。

「はい、それで先輩に現在の状況を説明して、指示通りに動いてみると、長谷川さんの死体を発見したんです。そのあと、全員を大至急でいか所に集めるようにって先輩が……」

「明瀬君が？」黄金井は考え込むそぶりを見せた。「彼がそこまで言うとなると……菱田さんが心配だ。行こう」

そう言つて早足で広間を出て玄関へ向かった。永緑たちも慌てて追う。ちょうど鳩村が二階から降りてきたところだった。どうしたの、と鳩村が素早く問う。永緑が、菱田さんが戻ってなくて、と答えると、彼女も合流してついてきた。

初めに靴を履いて山荘の外に出たのは黄金井。次いで倉内。その後ろから、靴もろくにはけていない状態で、畑口が転ぶように飛び出る。階段前で言葉を交わした鳩村と永緑はやや遅れて現れ、最後に金山と土森が出てきた。

菱田は車に忘れ物をしたと伝えたらしいが、彼の車には彼が要る様子はない。どこに行ったのかと皆が見回していると、

「ねえ、離れの中……」と倉内が若干青ざめながら言った。

見ると、離れの窓の向こうで、赤いものが揺れている。

——炎だ。

一斉に離れに駆けだして、意外にも足が速く真っ先に到着した煙口が、離れの扉を開けると、その中は真っ赤に染まっていた。

灯油の臭い。離れにはストーブに使う灯油が保管されていた。それが撒かれて火をつけられたらしい。

高く上がった炎の奥に、床に横たわる菱田の姿が見えた。

「菱田さん！」

炎の壁の向こうに呼びかける煙口。その足が前に行きそうになるが、土森に腕をつかまれ引き戻された。「無謀だ」

「消火器はどこですか」

鳩村が訊くと、金山は山荘にあると言う。金山と鳩村の二人は消火器を取りに戻っていった。

「消火器じゃなくても、雪をかけて消したりできませんか？」

永緑が思いついて提案するが、

「スコップとかはこの離れの中にあつたから、雪をすくえるような道具はないぜ。この火の勢いじゃ、あつても焼け石に水かもしれないけどな」煙口は悔しそうに小屋をにらみつけた。

「ここまでの火は、消火器でも消せないだろう。唯一の救いは、周りに木がないことに加え、雪で燃え広がりにくいことで、山火事は発展しなそうだとということだな」

土森が無感動に言う。

中に人がいる建物が燃えていく様を、まざまざと見せつけられて、永緑は耐え切れずうつぶした。その時、地面に落ちていた小さな紙片を見つけて、それを拾い上げる。……描かれたマークに見覚えがあつた。輪の中に、仏画などで見るようなデザインの植物——蓮だ。

『白蓮の寺』……」

確か、あの作品は、火事の寺の中で、母親が男を殺した直後の映像が、主人公の幼少期の記憶に刻まれていて、主人公が大人になつてからその真相を探るといった内容の話だ。

男の死体と燃え盛る炎——。

永緑が、蓮の紋を見つけたことを皆に伝えると、ちようどそこに

鳩村たちが消火器を持って戻ってきた。やはり、消火器では火を静めるのに足りない。永緑たちは、離れが燃えていく情景を、黙って見ているしかなかった。

雪は、完全に止んだ。

9

燃え続ける小屋を突っ立って眺めている永緑たちの背後から、車の音が聞こえてきた。

警察が来たのかと永緑は振り返るが、そこに現れた車は、パトカーではなく、落ち着いた赤の一般車だった。車は駐車スペースのど真ん中で止まった。皆がそれに注目する中、運転席の扉が開く。そこから出てきたのは……。

「明瀬先輩！」

わずかに眉を寄せて、苦い顔をしている明瀬。彼は真っ直ぐ歩いてくる。

「先輩、どうしてここに」永緑が不思議そうに言う。

「昨日、鳩村さんから電話があつてね。不安だったから、夜のうちに事務所を出発していたんだ」明瀬は説明する。「この辺りは昨日の夕方からものすごい吹雪になつてたみたいだけど、少し下の別荘地は、昨日の時点ではまだそうでもなくてね。一か所だけ民宿があつたから、昨日はそこに泊まっていたんだ。ところが朝起きてみると、別荘地の方でも結構な吹雪になつていた。その時は雪が止んでからここに来ようと思つていたんだけど、事件の知らせを聞いて、ちよつと無理をして駆けつけたという次第さ。でも……」

明瀬は炎に包まれた離れを見て、ため息を吐いた。

「少し、遅かったようだけどね……」

明瀬は気を取り直して、自己紹介をする。

「探偵の、明瀬匠吾といいます。鳩村さんから事情はおおかた聞きました」明瀬は初対面の人物をそれぞれ見ていきながら、「山荘のオ

「ナーの金山さんと、ミス研の大先輩の倉内さん、それと、同じく土森さんですね。初めまして」

明瀬は慇懃に頭を下げる。その様子を見た土森は、目を細め、わずかに口角を上げた。

「なるほど。君は、すでに事件の犯人に気づいていたわけか」

「……？」

永緑はその言葉の意味がわからず戸惑う。

「君が電話した時点で、菱田君はまだ死んでいなかったのだから、鳩村君が君に、菱田君の死を伝えることはできなかった。そして、君がここにたどり着いて車を降りてから、誰一人、『菱田君が死んだ』とは話していない。」

にもかかわらず君は、私が菱田ではなく土森だと断定した。金山さんは年齢が離れすぎているからわかるとしても、菱田君とは二歳しか年の違わない私が土森であることを、初対面で瞬時に判別できたのはなぜか。

それはすなわち、君が犯人を知っていて、次の事件がどのようなものであるかを、予期していたからにほかならない」

「……ええ、ご名答です。しかし、先程のセリフはそっくりそのままあなたにお返ししますよ。あなたも、すでに犯人に気づいていたわけですね、土森さん」

「もちろんだ。長谷川さんが死んでいると判明した時点で、この事件の犯人は自明だからな」

お互いに相手を見据え、静かに火花を散らす土森と明瀬。ただ、その後ろでは、本物の火花が激しく散っているわけで、その様子は滑稽というほかないが。

「事件の犯人がわかっているなら早く言いなさいよ。『戻り川心中』の見立てがまだ残ってるのよ。いつ次の事件が起こるか」

倉内がいらだちをあらわにするが、土森は平然と否定する。

「いや、もう事件は終わった。放っておいても、これ以上殺人は起こらない」

「……どうということよ」

「この事件の犯人はたった今亡くなった、菱田君だったということだ」

探偵二人と鳩村以外が息をのんだ。永緑は、今の土森の言葉は本当なのかと問うように明瀬を見る。明瀬は軽くうなずいた。

土森は彼の推理を話し始めた。

「彼が犯人であることは、少し前に言ったように、長谷川さんが殺されていたことから明らかだ。長谷川さんが死んだと判明して間もなくこの火事が起こったために、考える時間がなくて気づけなかったかもしれないが、状況を整理すればすぐわかる。」

長谷川さんが生きていたと最後に確認されたのは、彼女が食堂を出ていった時。そして、彼女が死んでいると判明したのは、鳩村君と永緑君が、その探偵の指示で彼女の部屋を訪ねた時。この間、一度でも二階に行った者は、朝食前に彼女を呼び戻しに行った菱田君以外にいないのだよ。

彼は、長谷川さん呼びに行くふりをして二階に上がると、おそらく、朝食があるからと、本当に部屋の中の長谷川さんに伝えたのだろう。一旦部屋に戻って落ち着きを取り戻した彼女は、その誘いに応じて部屋から出てこようと扉を開く。しかし、その不意を突いて、彼は彼女の首を貫いた。

……そんなところではないかと思うがね。まあ、殺害当時の状況はどうであれ、犯行が彼にしか不可能だったということは確かだ。

加えて、この離れが燃えて彼が死んだことも、彼自身の仕業と考えるよりほかない。畑口君と金山さんの共犯だというなら別だが、この二人は山荘に入る直前まで菱田君の生存を確認している。それ以降は全員が山荘にいて犯行は不可能なのだから、菱田君自身が離れに火を放って自殺したと考えざるを得ない」

黄金井は複雑そうに顔をしかめながら、

「……そう、ですね。菱田さんが事件の犯人なのは正しいようです。しかし、動機はどうなるんでしょう。長谷川さんや島貫さんは初対

面だったはずですし、伏見さんに至っては彼の恋人でした。動機があるようにはどうしても思えないのですが」

そこで、鳩村が口を開いた。

「そのことですけど、私、明瀬君の指示で、伏見さんの遺体をもう一度確認してきたんです。見たところ、彼女の首にロープの跡は一つしかなく、ひっかいたような傷もありませんでした。」

もし、彼女が誰かに首を絞めて殺されたあとで、クローゼットにつるされたのであれば、首を閉めた時のロープの跡が、クローゼットにつるされている状態でロープの当たっている部分と一致するはずがありません。絞殺時の跡と、つるされた時の跡が二重に残るはずなんです。また、首を絞められれば普通は抵抗して、首にひっかいたような傷が残るはずですが、彼女の死体にはそれが見られませんでした。

ですから、伏見さんは誰かに首を絞められて殺されたわけではないと考えられます。彼女の遺骸を発見したのは、明らかに他殺だった島貫さんの直後でした。そのことも手伝って、私たちは彼女は殺されたのだと、頭から決めてかかってしまいました。ですが、死体の様子から考えると、彼女の死は他殺ではなく、自殺です」

鳩村は淡々と事実だけを述べた。

「自殺……」驚きを隠せない黄金井。

「しかし、一つ奇妙なことが」鳩村は続ける。「部屋には、首をつるための台になるものがありませんでした。椅子は机に入れてありましたし、荷物は部屋の端においてありました。彼女が何を台にして首吊り自殺を図ったのが不明です」

鳩村が言い終えると、土森は推理を再開した。

「首つり用の台の問題は、ひとまず置いておこう。その前に菱田君の動機の話だ。伏見さんは自殺だった。だから、少なくとも菱田君にだけは確固たる動機があったのだよ。復讐という動機が。」

つまり、伏見君の自殺をきっかけにして、菱田君は二人の人間を殺害するに至ったのだ。

伏見君と島貫さんたちは互いに面識があり、関係は良好ではなかった。特に伏見君の方が彼らを恐れていたという。彼らが伏見君の自殺の原因であることは十分にありうることだろう。例えば、高校時代彼らにいじめられていて、そのトラウマがよみがえったとか、弱みを握られていて、それを私たちにばらすと脅されたとか。そういったことが理由ではないかと思う。

結果、彼女は自殺した。もし彼女が自殺の原因を記した遺書を残していて、菱田君が初めに遺体を発見しそれを読んだとすれば、このことは、彼らを殺めるに足る動機になる。恋人を自殺に追い込んだ二人への復讐というわけだ。

まず、夜のうちに伏見君は自殺していて、それを菱田君が比較的すぐに発見した。恋人の部屋を訪れる理由はいくらでも思いつくし、あるいは、翌日の奇術の打ち合わせに訪ねたのかもかもしれない。ともかくそこで伏見君の死体を発見した菱田君は、島貫と長谷川への復讐を誓う。同時に、伏見君が首つり用の台にしたもの——おそらく部屋にあった椅子だろう——をもとの位置に戻し、伏見君の自殺と悟られにくくした。自分の動機を一時的に——つまり、殺人計画が終了するまで隠すためだ。伏見君が自殺だと知られば、必然的に自分が疑われるからな。

また、「桔梗」の部屋での首つり自殺、ということから連想して、彼は、伏見君の死を見立て殺人に偽装することを思いついた。伏見君の死は、本当は見立てでも殺人でもなかったわけだが、彼は「藤」の部屋の島貫さんを、胸を突いて殺すことにより、事後的に連続見立て殺人を成立させてしまったのだ。

菱田君は見立ての題材となった本における、第一短編『藤の香』の次に第二短編『桔梗の宿』という作品の順番を利用して、実際に事件が起きた順番も「藤」の部屋の島貫さんのあとに、

「桔梗」の部屋の伏見君だと印象付けようとした。このことによつて伏見君は二番目に死んだことになり、事件の起点とは考えられにくくなるからだ。初めに死んだ人物より、二番目に死んだ人物の方

が自殺は疑われにくいと考えたのだろう。

さらに、伏見君の死体を見立てに偽装することは、死後に手が加えられたと錯覚させることにつながる。見立てには自殺を他殺に偽装する意味が二重にあったということだな。

二人の死体が発見されたあと、菱田君は長谷川さんを喉をついて殺害し、『桐の柩』の見立てを行った。ここで彼の復讐は終わったが、しかし、彼は『白蓮の寺』に見立てて自身も死ぬ道を選んだ。恋人を失い、二人もの人間を殺したのだ。動機としては十分だろう。かくして、吹雪の山荘における連続見立て殺人は幕を下ろしたというわけだ」

土森の喋っている間に、離れはあらかじめ燃えてしまい、火の勢いが若干だが収まってきた。事件の大まかな流れが示されたものの、倉内はまだ納得できていないことがあったらしく、疑問を口にした。「それで、その紙は何なの？」

倉内は永緑の持っている紙片を指さした。先ほど離れの前で捨てた、蓮の紋が印刷されたものだ。

「それが『白蓮の寺』の見立てだっていうのはわかったわ。でも、計画殺人でもないのに、そんなものどうやって用意したのよ」

倉内の質問には明瀬が答えた。

「見ての通り、その紙は本の一部を切り取ったものです。長谷川さんの部屋に落ちていた、桐の紋が描かれた紙片と同様のものと思われます。そうだよ、鳩村さん」

「ええ」と鳩村はうなずく。

「となれば、それらが切り取られた本は、家紋の画像が複数載っている本ということになります。そのような本は、かなり数が限られているでしょうが、自分には一冊、心当たりがあります。……ところで、泡坂妻夫の家業を知っていらっしやいますか」

明瀬は唐突に話を変えた。倉内は一瞬戸惑ったようだったが、すぐに思い当たったらしく、

「……ああ、紋章上絵師、だったわね」

「そうです。簡単に言えば、家紋を描く仕事ですね。それを生業にしていた泡坂妻夫の著書に、『家紋の話』という本があります。紋の歴史や意匠を語った一冊で、そこには多数の家紋の画像が収められています。その紙片はきつとその本から切り取ったものでしょう。菱田さんと伏見さんは泡坂妻夫が好きだったそうですから、そのどちらかが、『家紋の話』をここに持ってきていたのだと思います」

10

事件に説明がつけられたので、警察の到着まで山荘で待つことになった。皆がぞろぞろと戻っていく中、鳩村と土森を明瀬が呼び止めた。ほかの全員が山荘に入ったのを見てから、明瀬は、外は寒いですから、と二人を車の中に誘った。

明瀬が運転席に、土森は助手席、鳩村は後部座席に座った。

「それで、木埜さん」明瀬はあえて探偵の名前で土森を呼んだ。「いくつか、納得できないことがあります」

木埜は、ほう、とその顔に薄笑いを浮かべた。明瀬は前方を向いたまま話し始める。

「まず引つかかるのが、伏見さんが自殺して、菱田さんがその復讐で島貫さんと長谷川さんを殺害したのであれば、なぜ、一夜のうちに二人とも殺してしまわなかったのかということです。朝になって島貫さんと伏見さんの死体が発見されれば、当然警戒されて、長谷川さんを殺しにくくなることは想像に難くありません。長谷川さんを殺すなら、夜のうちに殺してしまった方が確実だったはずですよ。木埜も前を向いたまま、平然と答えた。

「見立ての順番を意識させて、伏見君が二番目に殺されたと強調するためではないかね。島貫さんと伏見君の死体が発見された後で、長谷川さんを桐の見立てで殺すことによって、『桐の柩』の見立てが三番目だとはっきり示すことができる。これは間接的に、『桔梗の宿』の見立てが二番目だという思い込みにつながるはずだ」

「いえ、それは違うと思います。そもそも、菱田さんが見立てをした理由を、あなたはこう推理しました。伏見さんを他殺に偽装することによって、菱田さんの犯行動機を、復讐が終わるまでの間、隠すためだと。ですが、夜のうちに長谷川さんを殺害して目的を果たしてしまえば、まったくそのようなことをする必要はないんです。

ではなぜ、彼は長谷川さんを夜のうちに殺さなかったのか。伏見さんの死体を発見したのが朝方で、ほかの人がいつ起きてくるかもわからない状況であれば、犯行前後に目撃される可能性を避けて、犯行を見送るということもあり得ます。しかし、島貫さんが殺されたのは、血の変色から夜中であるというのがわかっていますから、彼が島貫さんを殺したなら、長谷川さんを殺す時間的余裕はあったことになります。やはり、どうして二人の死体が発見されてから長谷川さんを殺したのか、という点が問題になりますね。

その理由について述べる前に、ほかに引っかけ点はいくつか挙げていくと、この疑問はより明確な形をとります。

例えば、島貫さん殺害時の凶器の問題。島貫さんの胸に刺さっていた凶器は、登山用のナイフで、どうも島貫さん本人のもののようにだったそうですね。しかし、伏見さんの死体を発見した菱田さんが、明確な殺意のもとに島貫さんの部屋を訪ね、殺害したのであれば、普通は事前に凶器ぐらい用意して行くのではないでしょうか。凶器が被害者の所有物だとすると、まるで、その場であったと、衝動的に殺したように見えます」

「凶器から犯人がわかってしまうことを避けようとして、被害者のものを使用したという可能性は？」木埜が挑戦的に訊いた。

「低いと思います。菱田さんは自身の犯行を隠そうとはしていません。長谷川さんを殺した時は彼にしか犯行が不可能でしたし、最終的に、彼自身自殺しています」

「では、長谷川さんを殺すまでの間は自分が犯人だと気づかれなかったとしたら？」

「その場合、なぜ夜のうちに長谷川さんを殺さなかったのかという、

最初の問題に回帰してしまいます」

「なら、実際に島貫さん殺害は衝動的な犯行だったとしたらどうだ。伏見君の死の理由を知った菱田君は、島貫さんの部屋を訪ね、彼を責めた。しかし、島貫さんが反省する気のないような態度をとったため、かっとなって、その場にあって登山ナイフで彼を殺害した」

「ええ、その可能性も考えました。が、その場合も少し気になることがあります。伏見さんが自殺に用いた台のことです。

伏見さんが首つり台として使ったものが、部屋に見当たらなかったことは、すなわち、部屋に倒れていた首つり台を、菱田さんがもとの位置に戻してしまった、ということを示しています。

彼がそのようなことをした理由は、伏見さんの自殺を隠すため、としか考えられません。であれば、なぜ伏見さんの自殺を隠したのか。その理由は、やはり、菱田さんの犯行動機を一時的に隠すため、ということになるでしょう。そうすることで、自分の復讐計画を遂行しやすくしたんです」

「言っていることが矛盾していないかな？ 君は先ほど、見立ては犯行動機を隠すためではないと主張した。しかし今度は、動機を隠すために、伏見君が首つりに使った台をもとの位置に戻したと言う」

「いえ、矛盾ではありません。想定している状況が違えば、前者は不適でも、後者は正しいということがあります。

……話を戻しますね。菱田さんは首つりに使われた台をもとの位置に戻しました。これは、遺体発見時点で菱田さんに明確な殺意があったことを示しています。菱田さんが島貫さんをかっとなって殺すという可能性は低いと言わざるを得ません」

「まあ、首つり台に関する君の意見を、一応認めるとしよう。しかし、その場合も、島貫さんを衝動的に殺害した後で、菱田君が復讐計画を立て、その計画を遂行するために首つり台をもとの位置に戻したとは考えられないかね。計画を思いついたのが朝方だったため、長谷川さん殺害は死体発見後に見送らざるを得ず、応急処置として、首つり台をもとの位置に戻すだけにとどまった」

「まあ、考えられないことではありませんが、島貫さんを殺害した夜中から、朝になるまで殺害計画をうんうん唸って練っていたというんですか？ そんなことをするくらいなら、単純に長谷川さんを殺害すると思うんですけどね」

明瀬は、木埜との応酬に多少の疲れを見せて、最後は半ば呆れ気味に言った。ここまではまだ、木埜の推理に対する疑問点を示してきたにすぎない。明瀬はここから自分の推理を展開しようと、一旦まとめにかかった。

「……と、いうわけで、あなたの推理には、凶器が島貫さんの所有物であるにもかかわらず、菱田さんの犯行は計画的である、という点にわずかながら齟齬があります」

明瀬は、誰に向かってというわけではないが、姿勢を正して、息を深く吸い込んだ。

「……では、こちらからも推理披露といきましょう。さて、この事件を俯瞰してみると、目につくのは、最初の二つの事件と、あとで起こった二つの事件との、隔たりです。

最初の二件が夜中に起こったのに対し、あとの二件は、それらの死体発見後に起こっています。また、先の二件は見立てに「藤」と「桔梗」という、部屋の名前が用いられているのに対し、後ろの二件は家紋が用いられています。そして、前者は伏見さんの自殺も、島貫さんの殺害も、両方衝動的に見えるのに対し、後者は、長谷川さんの死も、菱田さんの死も、ある程度計画的に思われます。

これらの隔たりを踏まえて、自分はこう考えるわけです。この事件の犯人は、二人いる、と」

そこで、鳩村が驚いて声を上げた。

「え、じゃあ、島貫さんを殺した犯人が別にいるのね」

「そうなるね」と明瀬は冷静に答える。

しかし、鳩村は少し慌てたふうに、「殺人犯が、まだここにいるという……?」

「いや、そうではないんだ」明瀬は否定した。「犯人は両方とも、自

殺してしまっただけからね」

「……ということは、伏見さんが？」

「うん。彼女こそ、この事件のもう一人の犯人なんだ」

11

明瀬は木埜に向かって推理を語り始めた。

「そもそも、自分が鳩村さんから連絡を受けた時、まだ長谷川さんと菱田さんの死は確認されていませんでした。確認できた情報はまだ少なかったんです。しかし、島貫さん殺害の凶器が彼の所持品のナイフであったことから、彼の殺害は衝動的な犯行だと考えました。

そして、伏見さんと島貫さんたちとの関係が良好ではなかったと聞いた時に、皆は、長谷川さんに二人を殺す動機があった、と考えたようですが、自分はもっと別のことを考えました。

つまり、伏見さんが島貫さんを衝動的に殺めた可能性です。例えば島貫さんが伏見さんの弱みを握っていたとしたら、脅された伏見さんが、窮鼠猫を噛む、ということもあり得そうに思えました。この時点では全くの想像でしたけどね。でも、この考えでいくと、伏見さんの死は、衝動的に人を殺してしまっただけを悔いての自殺、という可能性もあると思います。鳩村さんに伏見さんの死体を確認してもらったんです。

すると、実際伏見さんは自殺でした。これで事件解決かなとも思ったのですが、そうはいかなかった。

首つり台が見当たらないと鳩村さんから予想外の報告があったんです。このことが何を示しているかを慌てて考えました。そして考えた結果、有力な可能性を二つ思いつきました。一つは、木埜さんが推理したように、伏見さんが自殺し、菱田さんが復讐殺人で島貫さんを殺した可能性。しかし、これは先程議論したような理由で却下しました。

そしてもう一つが、伏見さんが島貫さんを殺害し、自殺した後で、

朝になって伏見さんの遺体を発見した菱田さんが、長谷川さんを殺す計画を立てた可能性です。

鳩村さんを長谷川さんの部屋に向かわせて確認すると、長谷川さんは既に殺されていました。そして桐の紋が現場に落ちていた。

正直に言って、自分はこの時までこの事件が見立て殺人になると思っています。島貫さんと伏見さんの部屋がたまたま「藤」と「桔梗」だったのだと思っていたんです。いえ、実際は本当に偶然で、菱田さんがそれに便乗しただけなのですが……。しかし三件目の事件で、犯人は長谷川さんの部屋に桐の紋を置くことで、事後的に見立て殺人にしました。

菱田さんがこの事件を、事後的に見立て殺人にした意図は、伏見さんが島貫さんを殺した犯人だと考えれば、すぐにわかります。

すなわち、伏見さんをかばうため。菱田さんは、この事件を見立て殺人に見せかけ、事件に統一性を持たせることによって、一連の事件の犯人がさも自分であるかのように偽装しようとしたのです。

この解釈なら、様々な出来事に説明が付きます。まず、島貫さんが自身の所有物のナイフで殺されていたことも、伏見さんの衝動的な犯行だったならば疑問はありません。

首つり台の問題も、菱田さんが伏見さんの死体を発見したのが朝だったという解釈で納得できます。

菱田さんは、朝になって伏見さんが自殺しているのを発見し、おそらくその場にあった遺書を読んだ。そして伏見さんが島貫さんを殺害して自殺したと知った菱田さんは、伏見さんをかばおうと思い、とつさに首つりに使われた台を元の位置に戻し、伏見さんが他殺であるかのように偽装した。他殺であれば、伏見さんは事件の犯人にはなり得ませんからね。

そうして一時的にですが、伏見さんが島貫さん殺害犯だとばれないようにした菱田さんは、自室に戻って次の計画を立てた。自分が伏見さんの罪をかぶり、同時に長谷川さんに復讐を果たす計画です。つまり、長谷川さんを『桐の柩』の見立てで殺害し、自身も『白

蓮の寺』になぞらえて自害することによって、自分が事件の犯人になりかわろうという計画ですね。計画を立てたものの、課題が二つありました。

見立てを完成させるためには、「桐」と「蓮」を表すものが何か必要ですが、それを何にするかという問題と、伏見さんが島貫さんを殺害した凶器の問題です。

見立てに必要な「桐」と「蓮」の問題は『家紋の話』から一部を切り取ることですぐに解決しましたが、伏見さんが島貫さんを殺した凶器の問題は残りました。

どういうことかという点、伏見さんは島貫さんを衝動的に殺害したため、凶器に伏見さんの指紋が残っていたはずなんです。凶器は島貫さんの胸に刺さったままでしたから、返り血は少なく、伏見さんにかからなかったかもしれないかもしれませんが、凶器には指紋が残っていたはずなんです。そうすると、警察が来て指紋を採取した時に、いくら菱田さんが見立てを用いて誤魔化したとしても、島貫さん殺害の犯人は伏見さんだとわかってしまう。この点を菱田さんはクリアしなければならなかった。

しかし、死体を発見したのは朝です。自分が島貫さんの部屋に行つて凶器について伏見さんの指紋を拭き取ったとしても、その時に人が起きてきて目撃されなくても限らない。そもそも、血が固まった後で凶器から指紋を拭き取ったならば、きつと鑑識作業で判明して、なぜ殺害時に痕跡を消すのではなく、わざわざリスクの高い朝になつてから行動したのか、ということが問題になるでしょう。

そこで、菱田さんは一旦開き直つて、もう一度その凶器を——今度自分が——使うことにしました。つまり、長谷川さんを同じナイフで殺すことにより、堂々と島貫さんの遺体からナイフを抜いてしまう口実を作ったんです。

長谷川さんが一人で部屋に戻った後、伏見さんはこれを好機とばかりに二階へ行き、長谷川さんの部屋の扉を叩く前に、島貫さんの部屋へ行って彼の死体から凶器のナイフを抜き取った。そしてその

ナイフから伏見さんの指紋を拭き取り、自分の指紋をつけて、今度は同じナイフで長谷川さんを殺害した。そして、用意しておいた桐の紋を長谷川さんの部屋に置いて、また食堂へ戻った。……これがおそらく、長谷川さん殺害までの事件の流れです。その後の彼の行動は、山荘の皆さんが知っての通り。食堂で朝食をとったあと、金山さんと畑口の二人とともに雪かきに出ました。終了後、先に二人を帰らせて、離れの前に最後の見立ての鍵となる蓮の紋を置くと、中に入って灯油をまき、火をつけて自害したと思われず。伏見さんが島貫さんを殺した証拠となる、伏見さんの遺書は、おそらくこの時、一緒に燃やしてしまったでしょう」

明瀬は推理を終えて、一度木埜の方を見やった。
「さて、木埜さん。こんな解釈でいかがでしょう。おおむね説明がつけられたと思いますが」

しばらく木埜は黙ったあと、普通の調子で言った。
「いいだろう。しかし、ほかに言い忘れていないか？」
「そうですね……ええ、いくつか」

明瀬は表面で微笑みつつ、そのまま話を続けた。
「菱田さんの計画には二つの重大な不確定要素がありました。一つは、島貫さんの死体が発見されたあとで、長谷川さんが孤立するタイミングがあるかどうかということ。もう一つは、ほかの人が、この事件を『戻り川心中』の見立てだと認識してくれるかどうかということ」

この二つは、計画の進行に置いて絶対不可欠にもかかわらず、不確定の要素でした。菱田さんは、この二つの条件が満たされることを天に祈るだけで、運任せに計画を実行したのでしょいか。

……まあ、そう考えることもできます。最悪の場合、伏見さんの犯罪の隠蔽は止めて、無理やりにも長谷川さんを殺害してしまうつもりだったかもしれませぬ。しかし菱田さんが、二つの不確定要素に対して、何かしらの手を打っていたとは考えられないでしょうか。そう思って事件を振り返ってみると、ある人物の行動の特異性

が目につきます。木埜さん、あなたです。

長谷川さんは、偶然、一人で自分の部屋に戻っていったように見えます。ですが、なぜ彼女がそんな事をしたかという点、木埜さん、あなたが、むやみに彼女を刺激するような発言をしたからです。そして、この事件が見立て殺人である可能性を示唆したのも、あなたなんです。

これは偶然ですか？ 自分には、木埜という探偵が、意図的に長谷川さんの行動を操作し、見立て殺人の可能性を示唆して、菱田さんの計画をサポートしていたように思えます。

例えば、こういうストーリーは考えられないでしょうか。伏見さんの死体を発見したのは菱田さんではなく、別の男だった。その男は、菱田さんに伏見さんの死を伝える。恋人が島貫さんを殺害し、自殺したという事実を知ってショックを受ける菱田さんに、その男は復讐殺人の計画を持ちかける。これは、島貫さんと同様、伏見さんの殺人をかばうこともできるという計画だった。菱田さんはそれに一も二もなく飛びついて、計画を実行する。そして男は、菱田さんの行動がスムーズに進むようお膳立てしていた……。木埜さん、どうでしょう。この解釈は正しいと思われませんか？」

……私には何とも言えないな。しかし、もしその考えが正しかったとして、それは証明できるのか？ 結局、その男が行ったことはあくまで、長谷川さんに対して失言をし、ある事実に気づいた。それだけだろうか？」

「そうですね。実際のところ、どうだったのかはわかりませぬし、この想像を証明する手立てもありませぬ。その男がもし、伏見さんの死体が皆の前で発見された時、一番乗りで部屋に入った人物だったとすれば、伏見さんの部屋の取っ手にその人物の指紋が残っていたとしても、まったく問題はないでしょう」

「だろうな。では、君はどうする。君の推理を警察に伝えるのか？」
明瀬はしばらく木埜をじつと見たあと、また前を向いて答えた。

「……いえ、何も言いません。伏見さんが島貫さんを殺害したことも、菱田さんが命をかけて守った秘密を暴く気にはなりませんし、何より、伏見さんは自分にとって三年上の先輩ですからね。自己中心的な理由ですが、知り合いを殺人者にしたいとは思いません」

明瀬は一つため息をついた。

「しかしね……。木埜さん、あなたは何の目的でこんなことをしたんですか。いえ、あなたが自分のしたことを認めるとも思えませんから訊き方を変えましょう。あなたは何のために行動しているんですか」

「行動原理か……。私は、私の利益になることか、私が面白いと思うことのために行動するがね」

「……そうですか」

明瀬は敵意をにじませて木埜を見たが、彼は一向に気にするそぶりを見せない。ここで怒っても仕方ないと、明瀬は気を落ち着かせた。やがて、一転して普通の調子で言った。

「じゃあ、山荘に向かいますか。この車内での会話はなかったことにして、警察の到着を待つことにしましょう。もし警察が事件の真相に気づくなら、別にそれでも構いません。気づかなくても、こちらからそれを教える気はさらさらありませんけど。鳩村さんも、それでいいかい？」

ずっと後部座席で黙って話を聞いていた鳩村は、静かに言った。

「ええ、私は構わないわ」

「ありがとう」明瀬は短く言うのと、車のドアを開けて外に出た。

木埜と鳩村も続いて外に出る。離れはもうほとんど燃えてしまっていて、黒い炭になっていた。

木埜と鳩村に推理をほとんど話したものの、明瀬には、一つだけ話していいことがあった。おそらく木埜はもとから知っていることだろうが、この事件の、見立てに関わることだった。

数日後、黄金井から明瀬のもとに依頼の電話がかかってきた。事件に関して疑問があるのだという。

その疑問とは、木埜の推理の穴だった。明瀬が指摘したように、木埜の推理において、菱田が一晚のうちに島貫と長谷川の両方を殺してしまえば、見立てをする必要はなかった、という事実が気がついたのだ。

電話は明瀬の携帯に個人的にかかってきたもので、永緑は黄金井から連絡があったことを知らない。明瀬は、黄金井が事務所を訪ねると指定した時刻の少し前に、永緑を買い物にやらせた。事件の真実を知る人物は、最小限にとどめたかったからだ。

木埜に推理を語ったのは、明瀬の推理が正しいか確かめるためであり、鳩村に話したのは、彼女は木埜が何かを企んでいることを強く疑っていたからだ。事件に疑念を抱いているいろいろ詮索してまわられるよりは、すべて話して黙っていてもらう方がいい。

黄金井が事務所にやってくるのと、明瀬は永緑が不在の間に真相を順に説明していった。そして最後に、木埜や鳩村には話さずに終わった、見立てのもう一つの意味についても言及した。

彼らに話さなかったのは、これがトリックのような、事件の実際的な進行には関係しなかったことだったからだ。しかし、菱田の知り合いである黄金井には、是非とも知っておいてほしかった。

「……見立てにはもう一つの意味がありました。あの見立ては、菱田さんのメッセージが込められていたんです。

今回の事件の見立ては、『戻り川心中』になぞらえたものでした。これはそのまま菱田さんのメッセージなんです。つまり、この事件は、菱田さんと伏見さんの『心中』だ、と菱田さんは主張したかったのではないでしょうか」

「……短編集の名前がそのままメッセージだったってこと？」

「いえ、これは単に、短編集のタイトルとしての『戻り川心中』と

いう意味だけではありません。その表題作のストーリーを踏まえたうえでメッセージです。

あの短編の内容を覚えているでしょうか。あの話は、極端に言えば、歌になぞらえて男女が心中した話なんです。見立ての物語なんですよ。

菱田さんは、短編集『戻り川心中』所収の作品、『藤の香』『桔梗の宿』『桐の柩』『白蓮の寺』の四つの見立てを成立させました。これだけだと、表題作の見立てが行われていないように思われますが、実は、こうだったとは考えられないでしょうか。

菱田さんは、伏見さんの自殺に伴って、四つの作品の見立てをし、自殺をすることにより、表題作『戻り川心中』の見立てまでも完成させていた。

つまり、この一連の事件そのものが、『戻り川心中』という見立てを扱った作品の、見立てだったんです。そして、『戻り川心中』は見立ての話であると同時に、心中の物語でもあります。菱田さんは、見立てを利用して事件を『戻り川心中』と結び付け、間接的にこの事件が心中事件であると主張しているんだと思います。

彼は、先に亡くなってしまった恋人と一緒に、事後的に心中してしまっただけですね……」

「そっか……」

黄金井は、彼女にしては珍しくしんみりしてつぶやいたあと、やや元気を取り戻したのか、伏し目がちながら笑って、

「うん、そうだ。そういえば菱田さん、ずいぶんなロマンチストだった。今の今まで、忘れてたな」

もう少しで、永緑が帰ってくるころである。永緑に知らせたくないのであれば、そろそろ明るい顔にならなければならない。

幸い、二人は表情を取り繕うのは得意な方であったし、永緑はそういったことを見破るのは不得手であった。

このあと、永緑が帰ってきてから、また別の事件が始まるのだが、それはこの事件とは関係がないので割愛する。

吹雪の山荘で起こった、連続見立て殺人事件、及び心中事件の物語は、これにて閉幕である。